「……しゃ。…き……」

「…うしゃ。…きな…い」

「ゆうしゃ。おきなさい」
「う〜ん」
「ゆうしゃ。おきなさい」
「はっ！こ、ここは…」
　眠っていた男が目覚める。勇者と呼ばれたその男は……、件の天才ブサ男である。
「おはよう　ゆうしゃ
きょうで　あなたも　りっぱなおとなです
たびだった　ちち　の　あとをつぎ　まおうをたおす　たびに　でるのです」
「ゲ、ゲームの…【魔王を倒す勇者の冒険】の世界か！やったぞ！成功だ！装置は正常に機能したんだ！やはり私は天才だ！」
　自らを起こした女性の話など耳に入っておらず、子供のように飛び跳ねて喜ぶ男。その姿は現実世界の姿とは違う、精悍な容姿の青年である。
「うおお！わ、私の身体がこのようなイケメンに成るなんて！やはりゲームの中は最高だ！」
「ゆうしゃ！」
　男、改め勇者を起こした女性、勇者の母親が大きな声を出す。
「うわ！びっくりした！…あ、勇者のお母さん…じゃなくて、母さんこれはその、違うんだ…さっきのは…」
「この　たからばこをあけて　たびだつのです！」
「…え？」
　勇者の母はさっきの勇者の奇行の一切を無視して話を進める。
「…えと…、母さん？」
「さあゆうしゃ　このたからばこを　あけるのです」
「…もしも〜し？聞こえますか？おばさん？ババア！」
「さあゆうしゃ　このたからばこを　あけるのです」
　勇者の問いかけにも罵倒にも反応せず、同じセリフを繰り返す。
「こ、これはまさか…」
　勇者の脳裏にある一つの可能性が浮かび上がる。
「よっ…ぶべっ！」
「さあゆうしゃ　このたからばこを　あけるのです」
　　勇者が母の前から移動しようとして、見えない壁にぶち当たる。そして、お決まりの母の台詞。
「や、やはり！あの装置はゲームそのものを書き換えるようなものじゃない！だから私はゲーム内の決められた行動に逆らうことができないのか！」
　この場合、宝箱を無視してゲームを進行できないように宝箱を開けるまで移動が制限され、移動入力に反応して母がセリフをしゃべるようにプログラムされているのだ。だから

勇者もこの場から移動できないのだ。
「なんてこった！これじゃ仮に魔王を倒しても、エンディングが流れてクリア後モードになるだけじゃないか！英雄になってモテモテウハウハな余生を送ることが出来ないじゃないか！畜生！」
　勇者の命を賭した現実逃避は早くも暗雲が立ち込めてきた。
「いや、待てよ。この世界でも天才である私の頭脳があれば、プログラムを書き換える装置を作れるかもしれない。」
　　しかしこの男、挫ける事を知らない。
「私の作った【ゲームの中に入れる装置】装置を応用すれば…って、あれ？おかしいな…設計図は頭の中にあるのにそれを理解することができないぞ？どうなって…まさか！ス、ステータスか？かしこさのステータスのせいなのか？」
　まさにその通り。ゲームの中に入った男がゲームのプログラムに逆らうことができないように、男の能力もゲーム内のステータスに準じるようになっていたのだ。しかも、最高値に達しても元々天才であった男の知能にはまるで届かないであろう。
「終わった…、私の野望も何もかも…」
　勇者はベッドへ腰掛け、真っ白に燃え尽きている。その勇者の隣で勇者の母が優しそうな笑顔で佇んでいる。
「…くそ！何笑ってやがる！そんなに私が滑稽か！」
「さあゆうしゃ　このたからばこを　あけるのです」
　母のセリフは変わらない。
「この世界でも！この世界でも私は異物なのか！？この世界でも私は排斥されるのか！？誰も！誰も私を受け入れてくれやしない！！」
「さあゆうしゃ　このたからばこを　あけるのです」
　同じセリフを繰り返す。
「お前も俺を理解しないのか！？俺の母親だろ！？だったら受け入れてくれよ！愛してくれよ！抱きしめてくれよ！なあ！」
「さあゆうしゃ　このたからばこを　あけるのです」
　それでもセリフは変わらない。
「…！そのでかい胸も何の役にも立たないじゃないか！」
　勇者は自暴自棄になって母の胸を乱暴に鷲掴みにする。
　ぽにゅんという音が聞こえそうなほど柔らかい弾力が勇者の手を押し返した。
「あっ！ご、ごめんなさい…」
　その感触に我に返った勇者はとっさに謝るが時すでに遅し、勇者の手にはしっかり母の胸の感触が残っている。…が。
「さあゆうしゃ　このたからばこを　あけるのです」
　母は微動だにせず、同じセリフを口にするだけである。
「…まさか」
　勇者が再び母の胸に手を伸ばす。
　今度はやや控えめに、しかししっかりと母の胸を掴む。そして母の顔色を伺いながらゆっくりと揉み始める。

母は自らの胸を息子である男に揉まれていても、咎めることも、嫌がることも、表情を変えることもなく佇んでいる。
「お、お母様？…胸…揉んじゃってるけど…いいの？」
「さあゆうしゃ　このたからばこを　あけるのです」
勇者の問いかけは【話す】コマンドとして受け取られているようで、母は決められたセリフで返事をする。
「さ、触れるんだ。移動はできないけどベッドには乗れるし、登場人物に触ることもできる…なんて、なんてご都合主義なんだ！」
勇者は胸を揉む手を激しくさせながら、この世界の理を受け入れる。
この仕様は【ゲームの中に入れる装置】による都合のいい改変であるが、当の勇者にはいまさら関係ない話である。
「ハア、ハア、…やわらかい…これが…女性の胸、おっぱい…」
長年封印していた男の性欲に火が付いた。そもそも、女体に触れること自体、思春期を迎えてから初めてのことである。抑えなど効くはずもない。
「すごい、服の上からでもこんなに柔らかいなんて、手が…止まらない！」
服の上からとはいえ、乱暴と言える手つきで胸を揉まれては快楽よりも痛みを感じるだろう。しかし勇者の母は勇者を見ることもなく、まっすぐ前を向いてされるがままになっている。
「ちょ、直接触ったらもっと柔らかいのかな？」
勇者は母の服を捲り上げると、大きな胸が顕になる。母がブラを着けていない理由は、ゲームの世界観に準じた結果であるのだが、今の勇者には何故ノーブラなのかという疑問すら頭に湧いてこない。
勇者は露出した母の大きな胸を両手で持ち上げるように揉みながら、未だかつて経験した事のない柔らかさと弾力を併せ持つ、女性の乳房の感触を味わっている。
「柔らかいけど…柔らかいだけじゃなく、指を押し返してくるこの感触！それに…このピンク色の乳首…」
胸を激しく揉まれ、母の乳首は勃起し始めていた。勇者はその乳首に狙いを定め摘まみ上げた。
「こ、これはまた…柔らかいとも言えるし、硬いとも言える感触…」
摘まみ上げた乳首をコリコリと指で転がしたり、キュッキュッと何度も潰すように摘んだり、新しい玩具で遊ぶように母の乳首を弄りまわす。
さらに勇者は母の乳首を口に咥え、チューチューと赤子のように吸い始めた。勇者が乳離れして10年以上も経っているので、当然母乳など出るはずもない。しかし母乳が目的ではない勇者は、執拗に母の乳首に吸い付き刺激し続ける。
「チュー…チュー、ぷぁ！おお！乳首ってこんなに大きくなるものなのか…」
チュポンと音を立てて勇者の口から解放された母の乳首は完全に勃起しており、目に見えて体積を増していた。
「ふぅ…胸もいいけど、やっぱり気になるのは…下だよな～」
　柔らかく触り心地のいい胸の感触を名残惜しみながら目標を母の下半身へと移す。
母のロングスカートの裾を握り、母が無反応なのをいい事に思い切りめくり上げる。

「おおお！こ、これが…パ、パパパ…パンティ…というものか…」
　母の穿いていた下着はなんの飾り気もない野暮ったい下着であったが、勇者は生まれて初めて見る女性の生の下着に感動していた。
「これが女性の太もも、自分のものとは全然違う…柔らかいしスベスベしてる」
　スカートの中に潜り込み、女の太ももに頬ずりをする勇者。もし誰かに見られていたら記憶から抹消したくなる光景だろう。
　長いスカートの中には、母の下半身から染み出るメスの匂いが充満している。勇者はそのメスの匂いに当てられたのか、母の尻を両手で掴み股間に顔を埋める。
「ムフー！ムフー！これが女の匂い！決していい匂いじゃないが、頭の奥が痺れるような匂いだ！」
　今勇者の感じている匂いは、現実の女の匂いとは全く別のものだ。本来プログラム上に存在しない要素には、勇者の持つイメージが強く影響する。つまり、勇者が今感じている匂いは勇者自身が無意識の内に想像していた『女の体臭』に過ぎないのである。
「こんな匂いだったらクンカクンカしたくなる気持ちもわかるな！」
　そんなこと知りもしない勇者は、母のお尻を揉みしだきながらパンツの上から秘裂に鼻を埋めるようにして股間の匂いを懸命に吸い込んでいる。
「スーハー…スーハー…、ん？」
　無我夢中で女の匂いを吸い込んでいた勇者だが、母の『ソコ』の変化に気がつき下着の上から秘裂を指でなぞる。
「やっぱり…濡れてる…」
　本来であれば真性の童貞である勇者が、女性を感じさせるなど到底できないことであるが、勇者の妄想が『性感帯を刺激すると愛液を分泌する』ことにしているのだ。
　童貞である自分が女性を感じさせているという事実が、勇者の行為をさらにエスカレートさせる。
　立ったまま悪戯されていた母をベッドに押し倒し、股間部がよく見えるように一気にスカートをまくり上げる。
　勇者はスカートを捲くられ露わになった母の下着を力任せに引き下ろした。勇者が生まれて初めて目の当たりにした女性器は、子を産んだ女性とは思えないほどピッチリと閉じており、陰毛は産毛すら生えていないツルツルのものであった。これは勇者の知識不足と偏執的な願望が原因である。
「ハーッ、ハーッ。これが女性のアソコ…女性器…オマ〇コ……オマ〇コ！」
　　もはやヨダレでも垂らしていまいそうなほど興奮している勇者は母の足を大きく開かせ、ピッチリと閉じた陰唇を左右に開き、愛液に濡れた粘膜を露にした。
「フーっ、フーっ、た、たしか、一番上のがクリ〇リスで…その下の小さい穴が尿道口…。この、下の方にあるのが…膣穴…オマ〇コ穴…チ〇ポを突っ込む穴…だよな…」
　左手で女性器を開き、右手で指差しながらその部分の名称を音読していく。
　窓から差し込む光に照らされてらてらと濡れ光る膣口は、まるで呼吸でもするかのようにヒクついている。
　勇者はヒクつく膣穴に恐る恐る人差し指を近づけ、ゆっくりと挿入していく。
「お、おお！入る！指が入っていく！…すごい、にゅるにゅるしているし、キュッキュっ

て指を締め付けてくる…」
　愛液で濡れ濡れになっている母の膣内で勇者は指を好きなように動かし、初めて触れる女性器を探索していく。指を引き抜こうとすると膣壁が逃すまいと絡みつき、指で中をひっかくように曲げるとピクピクと敏感な反応を返す膣内を面白がって、勇者は指を二本に増やしてさらに激しく責め立てる。
　母は自らの股間を好き勝手に弄り回され性的なイタズラをされていても表情を変えることもなく、勇者が話しかけない限り言葉を発することもない完全な肉人形と化している。
　肉人形と化している母の女性器は勇者におもちゃのように扱われていても、膣肉を解され愛液の量を増やし着実に性交の準備を整えている。
「も、もう入れてもいいかな？これだけ濡れているし大丈夫だよね？」
　勇者はふやけてしまいそうなくらい愛液にまみれた指を引き抜いて、いそいそとズボンと下着を脱ぎ始める。狭苦しい布から解放された勇者のペ〇スはビンッ！っと反り返り、若い精を滾らせている。
「ふおぉぉ…、現実の俺のチ〇ポとは比べ物にならねぇ…。これが勇者のチ〇ポ」
　勿論ペ〇スの大きさも勇者の願望によって設定されたものである。現実世界ではコンプレックスだった短小包茎のペ〇スも、妄想と願望の世界ではズル剥けの巨根となる。
「これを…あの穴に…入れるんだな…」
　ゴクリッと勇者は息を呑み、自らの初めての女性となる母の顔に目を向ける。
　母はあれだけ股間をおもちゃにされても、顔は旅立つ息子に向ける真剣な表情のままであった。通常ならば紅潮し息を荒げているところだが、押し倒す前となんら変わりはない。
「か、母さん？オマ〇コに、チ〇ポ挿れちゃうよ？」
「さあゆうしゃ　このたからばこを　あけるのです」
　勇者が設定上とはいえ母親に対しては禁忌とされる行為を口にしても、母はプログラム通りの言葉しか返すことはない。
「いいんだね？挿れちゃうよ？ダメって言わないとホントに挿れちゃうからね？」
「さあゆうしゃ　このたからばこを　あけるのです」
　自らのペ〇スの先端を母の膣口に押し当てながら、勇者は何度も決まった返事しかしないと解っている母に問いかける。
「挿れるよ？挿れ…い、れ、ちゃっ…た～！ア！アー！」
　勇者のペ〇スがぐちゅうぅっと音を立てて母の秘裂に押し込まれた瞬間、興奮が極限に達した勇者のペ〇スは暴発し、挿れただけで母の胎内に精液を迸らせたのである。
「さあゆうしゃ　このたからばこを　あけるのです」
　自らの胎内に自らの息子の精液が吐き出されていても、母は表情を変えず決まったセリフを口にするだけである。
「ア！ア！止まらない！腰が！射精してるのに！腰が止まらない！」
　ビュービューと精液を母の膣内に吐き出しながらも、快楽の余り自然と腰がカクカクと動いてしまう。しかも、勇者の射精は現実世界では考えられないほど長く続き、量も勢いも段違いであった。たった一度の射精で母の膣内を満たし、ジュポジュポとペ〇スが出入りしている結合部から精液が溢れかえるほどである。
　大量の精液を射精しながらペニスを抜き差しされている母の膣内は、マーキングでもさ

れているかのように膣襞の一枚一枚に精液を擦り込まれている。
「オ！オ！オオォォ…」
　勇者の長い射精が終わりに近づくにつれ腰の動きも緩やかになり、母に腰を押し付けるようにしてペ〇スを膣奥に固定し、思う存分始めての膣内射精に酔いしれる。
「ウ…フゥ…。スッゲェ出た…メッチャ気持ちいい」
　　射精が終わる頃には　結合部から溢れ出た精液でベッドがベトベトになっていた。
　大量に射精しても萎えることなくガチガチに勃起したままのペ〇スを、母の膣内はキュッキュッとさらなる精液をねだるように締め付けている。
「ハハッ！母さんもまだ満足してないみたいだね。俺ももっと射精したいし、このまま母さんのオマ〇コ使わせてもらうよ？」
「さあゆうしゃ　このたからばこを　あけるのです」
　勇者は母の返事を待たずして再び腰を動かし始める。
　一度射精した勇者はより強い刺激を求めて、大きく激しく腰をグラインドさせる。
　大きく張ったカリに膣襞をガリガリと擦られるたび、母は膣内を痙攣させ勇者のペ〇スを締め付けてくる。勇者はビクンビクンと痙攣する膣内に自分勝手にペ〇スを擦り付け、無抵抗の女性器を陵辱する快楽を楽しんでいる。
「柔らくって、暖かくって、ヌチョヌチョで、ビクビクチ〇ポを締め付けてきて、しかも使い放題中出しし放題！最高のオナホールだ！」
　実の息子である勇者に押し倒され、膣内射精され、挙げ句の果てにオナホール扱いで犯されている母は、グチョグチョに愛液を垂らす下半身とそんな状態の下半身など関係ないと言わんばかりで、汗一つかいていない表情の全く変わらい顔。まるで上と下が別人かと思うほどのギャップに、勇者はリアルではないファンタジーの、現実ではありえない倒錯的な興奮を覚えた。
　朝日が差し込む勇者の部屋に、清々しい朝とは無縁のネチョ、グチョ、ジュポ、ジュポ、という淫猥な音が響いている。
　　一体どれだけの時間そうしていたのか、長くも感じ短くも感じる時間、勇者は腰を振り続けていた。次第に湧き上がってくる射精感に伴い腰のストロークが短くなり、奥へ奥へと突き込む動きに変化していく。
　勇者は根元までペ〇スを挿入した時に、亀頭に感じる新たな感触に気がついた。
「オ？オ？なんか奥の方にコリコリした感触が…先っぽが擦れて気持ちいい！」
　その感触の正体は女性器の奥に位置する子宮口に他ならなかった。勇者はそれこそがオスの求める器官であることなど知る由もなく、己の快楽だけを求めて子宮口を責め立てる。
「オホ！押し込んだら亀頭が埋まっていくような感触がするぞ！これが女体の神秘ってやつか！？気持ちよすぎる！」
　執拗に責め立てられた母の子宮は口を緩ませ、突き入れられる勇者の亀頭を半ばくわえ込んでしまっている。さらに、勇者がペ〇スを深く挿入したままグリグリと腰を動かせると、子宮口にめり込んだ亀頭もグリグリと大きく動き、さらに子宮口を広げる動きになってしまっている。
　子宮を揺さぶられメスの本能も揺さぶられたのか、母の膣内の動きが活発になり勇者のペ〇スから精液を絞り出そうとする動きになってきていた。

「チ〇ポが！引き込まれる！もうこれ以上入らないのに！どこまでも吸い込まれていくみたいに！アア！出る！もう出る！出る〜！！」
　勇者は母の膣内の最奥までペ〇スを挿入したまま腰をガクガクと小刻み震わせて、一回目よりも激しい勢いで射精を始めた。
「オアア！亀頭が！吸いつかれて！精液吸い取られてる！！」
　メスの本能なのか、勇者の無意識の願望なのか、亀頭をめり込まされた子宮口は亀頭を半ばまで飲み込むほど大きく開き、ビュービューと精液を吐き出す鈴口は完全に子宮口に飲み込まれている。更には精液に反応し絶頂に達した膣肉は、ビクビクと痙攣して精液を吐き出させるためのポンプと化していた。
　鈴口が完全に子宮口に覆われているため、吐き出された精液は全て余すことなく母の子宮内に注ぎ込まれている。噴水のような勢いで注ぎ込まれる精液はあっという間に母の子宮を満たしたが、逃げ道である子宮口は勇者のペ〇スに塞がれ逆流することができないでいた。
　逃げ道を塞がれた精液は母の子宮内に溜まり続ける。とっくに満タンであったが、休むことなく新たな精液が射精され続けられた母の子宮は、注ぎ込まれる精液の分だけ徐々に膨らんでいった。
「オ！オホゥ！まだ…出るぅ！なかだししゃせいぃ！ぎもぢいぃ！」
　獣の咆哮のような声を上げてオスの快楽を貪る勇者には、子宮に押し上げられ下腹部が不自然に盛り上がっている母の姿は、もはや映ってはいない。
　勇者は壮絶な快楽に呼吸すら忘れて射精し続け、最後の一滴まで母の子宮に精液を注ぎ込んだ。
　精液も肺の中の空気も全て出し切った勇者は、一瞬意識が途切れると共に母の隣に倒れ込む。
　勇者がゼーゼーと全力疾走した後のように乱れた呼吸を整えていると、勇者の横で犯されたままだった母がムクリと起き上がった。犯さている間身動き一つしなかった母の突然の行動に勇者は驚いたが、母は脱がされていた下着を履き直して元いた位置に戻っただけだった。
　呆気にとられたままの勇者を放置して、母は何事もなかったかのように元の位置に立ち、旅立つ息子に向ける真剣な表情で前を向いている。
　勇者は今しがた経験した性体験を白昼夢ではないかと錯覚しそうになるが、自らが感じている疲労感や己の股間を濡らす体液が、幻や錯覚の類ではないことを物語っている。
　のそのそと起き上がった勇者は母の足元にしゃがみ込み、何の遠慮もなく母のスカートを脱がし始めた。紐を締めて留めているだけの簡素な衣服は、身につけている本人が抵抗しない限りいともたやすく脱がされるものであり、実際まったくの無抵抗である母のスカートは労することなく勇者に脱がされてしまった。
　母の下半身を包んでいたスカートが脱がされたことにより、本来隠しておかなければならない部分が、勇者の目の前に再び晒されたのである。その秘所を包む下着は、股間部分が完全に変色しておりうっすらと地肌が見えるほど濡れ、もはや本来の用途をなしていない状態であった。
　そのグショグショに濡れた下着もまた、先ほどの性体験が紛れもない事実であったこと

を証明している。
　そして勇者が母の下着をゆっくりと引き下ろすと、ちょうど股間にあたっていた部分が粘着く糸を引きながら離れる様が見て取れた。さらに、先ほどこれでもかと注ぎ込んだ精液が母の秘裂からボタボタと大量に溢れてきて、元々汚れていた下着をさらに白く染め上げたのである。
　その様子を見ていた勇者はたまらなくなり、再びペ〇スをいきり勃たせてしまう。
　もう一度母をベッドに押し倒し犯してしまおうかと思い始めた勇者は、溢れ出た精液が母の肉付きのいい太ももを伝っていくのを見て、この太ももを堪能したくなった。
　勇者は母を立たせたまま女性器の下、わずかに空いた太ももの隙間にペニスをねじ込んだ。
「お？これは…思ったより気持ちがいいかも…？」
　立ったまま、それも前から行う素股は女性はあまり気持ちよくないらしいが、勇者には相手のことなどどうでもよく、自分さえ気持ちよければいいのである。
「おお…さっきの精液がニュルニュルして、プニプニのオマ〇コとムチムチの太ももの圧迫感が…なんとも…」
　溢れ出てくる精液が潤滑油の役割を果たし、強めの圧迫感がそのまま強烈な快感となているようだ。勇者はその快楽を我慢することなく、母のお尻を掴んで一心不乱に腰を動かし始める。
　ベッドの上では犯され、今度は立ったまま太ももと陰唇にペ〇スを擦り付けられている。それでもなお、母は真剣な表情のまま抵抗も拒絶もせずに佇んでいる。勇者の母たるその女性は当の勇者にとって、まさに都合のいいメスの肉体を持った性処理玩具でしかなかった。
「現実とおさらばして正解だったぜ。現実じゃ女を抱くことも、こんな変態的なプレイも絶対できないからな〜。どうだよ？母さん？息子に犯されて、チ〇ポ擦りつけられて気持ちいいかい？」
　勇者は腰を激しく動かしたまま、性処理玩具にしている母に問いかける。
「さあゆうしゃ　このたからばこを　あけるのです」
　しかし母は、犯す前となんら変わらない決まりきった返答を繰り返すだけであった。
　もちろん勇者は別のセリフを期待したわけではない。
　ただ【決められた行動以外に一切の関心を示さず、一方的な性行為を無抵抗で受け入れる。生身の肉体を持った存在】。好きな時に好きなだけ犯すことのできる【NPC】の存在と、現実では決してありえないシチュエーションを堪能するための問いかけであった。
　この【ゲームの世界】でしか味わえないシチュエーションに、勇者の興奮は再び頂点へと駆け上っていく。
「ああ〜、また出そう…母さん、今度は何処に出して欲しい？」
「さあゆうしゃ　このたからばこを　あけるのです」
　勇者の無意味な問いかけに、母は決まったセリフを返す。無論はじめから母の意見など聞く気は勇者にはない。
「ああ〜出るよ…答えてくれないとこのまま出しちゃうよ？オマ〇コの入口に精液出しちゃうよ？いいんだね？」

「さあゆうしゃ　このたからばこを　あけるのです」
　母がセリフを言い終わる前に勇者は亀頭を陰唇にめり込ませ、膣口めがけて精液を射精していた。
　勇者は射精している間も腰をカクカクと揺らしているが、直立したままという体勢的に膣内への挿入は出来ず、亀頭を秘裂に擦りつけるに留まっている。結果、ビュルビュルと吐き出される精液は母の股の間をボタボタと滴り落ち、脱がしかけの下着に新たなシミを作っていった。
　そして、勇者は未だ射精中のペ〇スを母の股から引き抜き、太ももに亀頭を押し付けてムチムチとした太ももの感触を楽しみながら射精を続けていった。
「ふぃ〜、連続三回。こんなに射精したのは学生時代以来だな」
　三度の射精をへて、ようやっと冷静さを取り戻した勇者は、しみじみと昔を振り返っていた。……ペ〇スで母の太ももに精液を塗りたくりながら。
「なんかもう魔王退治の旅なんかしないで、このまま母さんをオナホにしながらここで生活していこうかと思ってしまうな。…しかし、勇者の母がこの調子なら他のキャラクターも同じなのかもしれないな、ここはファンタジーの世界…現実ではお目にかかれないような身分や職業のキャラクターもいるだろう。仲間キャラの戦士や武闘家、僧侶に魔法使い、街にはシスターやお姫様なんかもいるのか…うおお！興奮してきた！」
　母の太ももにペ〇スを擦りつけたまま物思いに耽っていた勇者は、この先出会う様々な女キャラクターに思いを馳せ、枯れることのない性欲を漲らせてきた。
「そうと決まれば早速冒険の旅に出発だ！」
　そそくさと服を着て、意気揚々と踏み出そうとした勇者は…
「ほぎゃ！」
　再び見えない壁に激突したのだった。
「そ…そういえば、宝箱を開けなきゃダメだったな」
　痛む顔面をさすりながら、勇者は宝箱を開けると…

『ゆうしゃ　は　たからばこ　を　あけた！』
『ゆうしゃ　は　やくそう　と　50G　を　てにいれた！』

　と、勇者の前に黒いメッセージボックスと共にメッセージが現れた。
「おお！ちゃんとセリフ以外のメッセージにはメッセージボックスが表示されるのか！こりゃ便利だ」
　などと感心している勇者を置いて、シナリオは進む。
「ゆうしゃ　まずは　おうさまへ　あいにいきなさい」
　宝箱を開けたことで自動的に母のセリフが進行する。既に衣服の乱れは直されており、外見からでは陵辱のあとを覗うことはできない。
「へいへいまずはお城ね、たしかここのお城はお姫様がいたよな…うひひ、今から楽しみだ」
　一国の王女を陵辱することへの期待に股間を膨らませながら、勇者こと天才ブサ男は改めて自らの部屋から旅立つのであった。